



ACTIVE HAYABUSA 1300

アクティブが来春に発売を予定する、オランダ・ハイパープロ製リヤショックを装備したハヤブサをライドする機会を得た。その販売法も含め、そのポテンシャルに期待は高まる。

Report:鈴木大五郎 Photo:徳永 茂

サス。ペンション戦線に 期待のブランド再臨

サスの性能を最大限に
引き出すための試行

マシンが高性能化する中で、サスペンションへの要求もより高まりつつある。そんな状況を反映して、さまざまな市販サスペンションが出回っている。STDではなかなか到達しえなかった動きの良さや高い質感など、カスタムフリークでなくとも魅力を感じる製品も多数ある。

現在、高性能と言われるサスペンションはどれもフリクションが少なく、性能に関しては間違いなくSTDを超えている。しかし、モノが良くとも、出荷状態のセットがマシンとライダーにしっかりと合っているかといえば、さにあらず。意外やトータルパフォーマンスではSTDを超えていない場合もある。

ライダーは体格や走り方も違えば、用途も違う。その全てをそつなくカバーするのがSTDであり、それは膨大な時間をテストに費やしたからこそその安心性能だ。対して、アフターマーケット製は、すべてにそのままで詰めきれない。例えば、レースワールドからのフィードバックもあるが、それが一般的な市街地走行ですべてマッチする訳もなからう。

そこで、アフターマーケット・サスへの換装が必要になるのが、個々に合わせたセットアップだ。

今回、紹介するハイパープロのイメージカラーで知られるハイパープロは、オランダで生産される高性能サスペンション。国内発売元のアクティブで

は、以前にも正規代理店としてそのリヤショックを販売した経緯があるのだが、今後はただの販売から一歩踏み出して、よりユーザーサポートの充実を図るといふ。具体的には、ライダーの体格や使用状況に合わせたサスペンションの販売。もちろん、なにもデータがないゼロからのセッティングでは、時間も手間もかかる。ライダーが経験豊富なら、そこから自分好みに作ることも可能であろうが、それでも製品自体にはある程度のベータを作る必要がある。

アクティブはそのための仕様設定を現在、ハイパープロ社の協力を得





① 今回の試乗の目玉となったハイパープロ製リヤショック。来春発売予定とのことで、現在はそのラインナップとその販売拠点整備が進められている。ライダーのリエストに合わせ、ワンオフやセッティングとアドバイスに対応する“サービショップ”と、例えばZやニンジャの専門ショップが自店仕様を作るなどする“テクニカルショップ”の2ラインが、段階的にはあるが全国規模で設定されるはずだ
 ② コクピットまわりを俯瞰。センターにハイパープロ製ステアリングダンパーが設置される。フロントフォークにも同社製フォークスプリングが入る。両製品ともスーパースポーツや人気ビッグネイキッドを軸に多くの車種用を展開中で、カスタムではすでに定番アイテム
 ③ シートはRSALレザーによる本革表皮のものに張り替えられている
 ④ アクティブが販売中のギルズツーリング製ステップ。ドイツで'00年に発売した新興ブランドで、ハヤブサ用は7ポジションタイプだ
 ⑤ ⑥ ⑦ 前後ホイールはアクティブの自社ブランド、ゲイルスピードタイプ。軽量アルミ鍛造品。サイズはF:3.50-17/R:6.00-17。マフラーも同社取り扱いの、スロベニア製アクラボヴィッチのスリップオンタイプ。ブレーキまわりもオランダのモトマスター製前後ディスクほか、アクティブ取り扱いブランドでしっかり固められている
 ⑧ シックで高級感あるカスタムペイントはアルファレイスデザインが担当。スクリーンはゼログラビティ製のダブルバブル。アブソリュート製HIDヘッドライトに換装。また、外装も自社ブランドのネクスレイドライカーボンパーツをタンデムシートカウルほか各所に巻く



短時間でサスは理想に近付いた

12月号のしゅぼん玉セラー100に引き続き、試乗は愛知・蒲郡のSPA西浦モーターパークで行った。まだリリース時のサスセッティングアップの要領でテキパキと作業を進めてくれたのはアクティブハイパープロ製品の開発を担う宇田知憲さん。写真中段。ワットにはアクティブの広報担当小山博由来さんも控え(下中央の人物)対応してくれた



進めているところという。今回の試乗はそんな状況での第報だ。まだ開発中の状況確認という程度であったことをまずお断りしておきたい。さて、その注目のハイパープロ製品を装着したハヤブサは、'10年春の東京モーターサイクルショーにも展示された、同社のデモマシン。アクラボヴィッチ製エンジンストやゲイルスピードのホイール等、アクティブが取り扱う製品群が装着されるが、すべてポルトオ品。大きなカスタムがされたわけではない。逆に、ハイパープロ製品を評価するには、望ましい状況だろう。

装着されるのは、現在も販売中であるフロントスプリングと、開発中であるリヤサスペンション。そしてステアリングダンパー。まずは数値上、そして経験上から「これくらいだろう」と導き出された仕様でコースイン。なるほど、STDに比べ作動性の良さは数段上である。ブレーキング時の踏ん張りも効く。しかし、コーナーでのスロットルの開けはじめでリヤの接地感が薄く、パワーをかけていくと腰砕けのような症状が出る。前後のバランス

また、その注目のハイパープロ製品を装着したハヤブサは、'10年春の東京モーターサイクルショーにも展示された、同社のデモマシン。アクラボヴィッチ製エンジンストやゲイルスピードのホイール等、アクティブが取り扱う製品群が装着されるが、すべてポルトオ品。大きなカスタムがされたわけではない。逆に、ハイパープロ製品を評価するには、望ましい状況だろう。

時間の関係で、納得いくまでまとめられなかったのだが、短時間で大きな成果が現れたのは、製品の確かさがあつたらだらう。パネパネしい動きではなく、ダンパーに包まれたかのようなしなやかさとポリリウム感。STDではなし得なかった領域である。アクティブでは、今後このようなデータ取りを進め幅広いデータの蓄積を図り、テクニカルショップを全国に設けて、セミオーダー的に製品を販売していくという。



もまだ取れない印象で、軽快にマシンがバンクし、わかりやすく舵角がつく。ハヤブサの美点も薄れがちである。その印象を伝えると、すぐさまスタップがセッティングを開始してくれた。インシャルを○回転。圧側ダンパーを○クリック……と、ピットインを繰り返しながら、マシンに変更を加えていくと、明らかにマシンの印象が変わってきた。接地感が高まり、旋回性も安定感もどんと高まっていく。